

デジタルハリウッド大学

## アドバイザリーボード会議

2024（令和 6）年度

第 1 回 2024 年 1 月 23 日（木）11:30-13:00

第 2 回 2024 年 2 月 17 日（月）13:00-14:30

[会 場] オンライン開催

[出席者]

第 1 回：ドミニク・チェン、池谷和浩（大学事務局長・大学事業部長）、今田健一郎（大学院事務局長・大学事業部副部長）

第 2 回：稲見昌彦、川田十夢、池谷和浩（大学事務局長・大学事業部長）、今田健一郎（大学院事務局長・大学事業部副部長）

[陪 席] 杉山知之学長※、小野妙子（大学事務局）、田村結奈（大学事務局）※Zoom のチャット機能を用いた発言

[議事]

- 1 DHU（デジタルハリウッド大学）の活動についての報告
- 2 アドバイザリーボードメンバーによる活動共有
- 3 大学認証評価の観点から組織運営と今後の展望について

### 1. DHU の活動についての報告

池谷事務局長よりアドバイザリーボードの背景と目的を説明。最新のトピックスとして、大学の学部生がアカデミー賞の短編アニメーション部門で受賞したことを紹介し、その評価の要因や社会的意義を述べた。また、近未来教育フォーラムでは杉山学長より 2024 年度を「The Great Transition」と評し、「ポスト AI は来ない」と生成 AI をはじめとした人工知能の汎用的な普及について重要な節目であると提言をしたことについて共有した。

### 2. 自己紹介と活動共有

各ボードメンバーより、各々のビジネスや研究について近況報告があった。

（ドミニク氏）

・マイナビが手掛ける「[MYNAVI ART SQUARE](#)」のアドバイザーとして一昨年より参画。デジタルハリウッド大学大学院で教鞭をとっていた草原真知子先生が実践していた「バーチャルキュレーション」のスタイルを引き継ぎ、山峰潤也さん、伊藤亜紗さんを講師に迎え、社会人や学生向けの参加型ワークショップを開催した。

このワークショップでは、社会的なテーマではなく、個人の偏愛や苦痛といった極めて私的な視点から問いを生み出すことを重視。また、「キーワード」を日本語で「鍵語」と表現し、それを基に既存のアーティスト作品をリサーチする手法を指導した。

・従来のエスノグラフィが社会的・文化的な他者を観察・研究するのに対し、オートエスノグラフィは自分自身を記述し、それを観察する手法である。この手法に着目し、研究や創作への活用を模索している。

その一環として、Takram の渡邊康太郎さんと共に、自らの拙さを自己観察するオートエスノグラフィ・ワークショップを開催。また、自身のゼミにも取り入れ、昨年 11 月にはゼミ生とともに展示会「[Re:ing Re:ing 展ーわたしの言葉を、あなたと聴きなおすー](#)」を開催した。

・熊谷晋一郎先生（東京大学先端科学技術研究センター教授）は脳性麻痺の当事者として研究を行っている。向谷地生良先生（精神科医）も、北海道浦河町で統合失調症の当事者が共同生活を送るコミュニティ「[べてるの家](#)」を創設。そこでは、医師による診断ではなく、当事者自身が自らの症状を言語化した当事者研究が実践されている。

両者の影響を受け、自身の吃音についての当事者研究を進め、昨年、相づちボットに関する論文が CHI で採択された。この研究では、言語教育学者・水谷信子先生の提唱する「共話」という概念に基づき、共話を促進する相づちシステムの可能性を探った。

（川田氏）

・国土交通省が主催する [PLATEAU AWARD](#) の審査員を務める。審査において、トグルホールディングスが大賞を受賞した取り組みに触れ、AI を活用した土地データへのアプローチの可能性や、その意義について説明した。

・クリエイティブ業界における AI 活用の必要性和、経済発展への影響についても言及。具体例として、自身が演出を担当した BUCK-TICK の武道館公演の映像を用いながら、AI 技術の活用事例を紹介し、AI と人間の技術がどのように共存できるかについて意見を述べた。

- ・ファッション業界において成功を収めた「[ゆとりくん](#)」の事例を挙げ、センシング技術を活用した新たなクリエイティブの在り方について考察した。

- ・ポスターが自販機になる仕組みを設計し、従来は経済活動が発生しづらかった AR 文脈における新たなビジネスモデルとして提案。近日、発表予定。

- ・AI を活用したディープリサーチを導入することで、法律を遵守しつつ新たな仕組みを構築できる可能性について語り、クリエイティブの範囲の広がりについて期待をしている。

(稲見氏)

- ・新たな教育プログラムとして「[東京大学カオスキャンパス](#)」を立ち上げ。カオスという概念をフックに、日本を代表するクリエイターや起業家と出会うことで、未来のスタートアップを生み出す人材の育成を目指す。現在、東京大学の総長、映画監督の川村元気氏とともに、多様な学生を集めたキャンプの実施を構想中である。

- ・AI が進化する社会においても、新たな価値を創造し、広めていく人間の役割は不変であるという見解を示した。ホモ・サピエンスが本質的に持つ「クリエイティブでありたい」という欲求を支援し、後押しする機関として、カオスキャンパス や デジタルハリウッド大学の重要性について述べた。

- ・自身が取り組む「スーパーヒューマン研究」において、近年は腸能力に着目。哲学者ダニエル・デネットが提唱する「知能の起源は腸である」という説に賛同し、今後の研究として腸脳相関の可能性について探求していきたい。また、AI が認識できない世界において「センシング」と「アクチュエーション」が求められる時代が再来すると考えている。

#### 4. 大学認証評価の観点から（理論と実務の架橋、業績指標など）

池谷事務局長よりカリキュラムや学習成果について実績を共有しながら、大学認証評価に対する DHU の考えを説明し、教育課程、教員の質向上、大学運営において意見を求めた。

(ドミニク氏)

- ・デジタルハリウッド大学は株式会社設立であることを活かし、承認プロセスや教授会などの大学組織の体制において、ロールモデルとなるような貢献のあり方を模索して欲しい。

- ・ファカルティ・ディベロップメント（FD）を推進しなければ、大学組織の文化が希薄化してしまうのではないかと懸念している。ハラスメント防止の体制づくりが進められている中で、単に禁止や予防策を講じるだけでなく、よりプロアクティブな対応が求められている。

・学生の中には「怒られたくない」「違反をしたくない」といった心理があり、ネガティブ・ケイパビリティへの関心も高まっている。そのような状況の中で、大学における「学びや」とは何かを、改めて問い直す必要がある。

(川田氏)

・デジタルハリウッド大学では、既に優秀な人材が輩出されていることを現場で体感している。今後さらに重要なのは「1人で徹頭徹尾、何かをつくる」という経験を積んだうえで社会に出ることである。そのために、デジタルハリウッド大学としてどのようなプロセスを整備し、どのように関わっていくべきかを模索する必要がある。

(稲見氏)

・国立大学では、これまで「運営」という視点が重視されていたが、近年では「経営」の視点が求められている。一方、デジタルハリウッド大学は株式会社として経営の視点を取り入れた運営をすでに実践しており、これは非常に先進的であると考える。

・会議の議事録や記録については、ChatGPTなどのAIを活用し、エビデンスを残すことも有効な手段ではないか。

・学校経営以外に不足する教育の要素については、外部講師との共創によって補完されているので、既に実施されているかもしれないが、学生や教員の満足度調査を同時に実施することで、より教育の質向上に繋がっていく。短期的な満足度ではなく、学生の「表現する力」や「創造する力」を高めることが理想的であり、そうした環境づくりを通じて、自立した学生の育成を目指しながら他大学へのモデルとなってもらいたい。

最後に池谷事務局長より、貴重なご意見を賜ったことと、引き続きご協力賜りたいとボードメンバーへ謝意を表した。

以上